

ボクと契約してヒー
ローになってよ！

292299

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

無個性の緑谷出久は、魔法の使者を自称するQ.Bと契約し、魔法少女になつた。その
魔法は一撃必殺、その代償として4歳のまま成長は止まり、さらに魔力を使い切れば完
全な女の子となってしまうのだ！

目

誰も知らない終末記念日
もう、そこにいない貴方
私の生まれた、その理由

次

32 14 1

誰も知らない終末記念日

無個性である事を4歳の緑谷イズクは告げられた。

オールマイトに憧れていたイズクは、それまでの文明を一掃されたような衝撃を受け
る。

この世界で誰も彼も優れた個性を得られる訳ではなく、よくある事だ。

オールマイトに憧れた他の子供も、自身の個性を知つて落ち込んだ事だろう。
しかし、無個性と告げられたイズクの精神は他の者よりも傷付いた。

それは結局、オールマイトのような個性を得られなかつた事は重要ではない。
無個性であつた事実こそ、イズクが立ち直れなくなつてしまつた原因だ。

それから10年先までイズクは、すでに折れた夢を見続ける。

友人もなく恋人もなく、幸福な記憶もない。

雄英高校に入学してから、それまでの学校に関する思い出もない。

存在しなかつたかのように空白で、思い出すことを拒絶している。

無個性だつた頃なんて存在しなかつたと、イズクは思いたいのだ。

これから10年もイズクは幸福を感じる事もなく生きるのだ。

それはなんて、かわいそうなのだろう。

それならば殺してあげた方が幸せだ。

「初めましてだね、緑谷イズクくん。ボクはQB、魔法の使者だよ！」
「魔法？ 個性じゃないの？」

猫のような生物が喋つても、イズクは気にしない。

異形型の個性は珍しい物ではなく、ありふれた光景だ。

美しさの感覚も違つて、人で言う美しさは絶対ではなくなつた。

これは人という規準が曖昧になつていてるからだ。

人の形をしていれば人類なのか、言葉を話せれば人類なのか。

では、人類ではない生物とは何なのか。

だからボクのような宇宙人も、人類として見てくれる。

「個性じゃなくて魔法だよ。プリキュアは知つてるかな？」

個性が世界に溢れても、プリキュアは不滅だ。

なぜならば個性は資格を得なければ、公的領域で使用する事は禁じられている。

プリキュアが個性を使い始めたら、すぐに放送休止となるだろう。

異形型への差別と批判されて消えたポケモンのように——ユングラーの話は止めようか。

しかし魔法と言い張れば、放送できる訳だ。

「プリキュア？」

「そう、プリキュアだよ」

「しらない」

「そうだよ。そのプリーーえ？」

しまつた。

ヒーロージャンキーを甘く見ていた。

オールマイトの動画を飽きもせず、無限ループするジャンキーだ。

ヒーロー番組しか見ていないに違いない。

「平たく言うと、ボクは個性のような魔法を君に与える事ができるんだ！」

「本当に？」

「もちろんだよ。たとえウソなら、イズクくんに害はないさ！」

ホントだった時は、害もあるけどね！

『だから僕と契約して魔法少女になつて欲しいな！』

「でも、僕は男だよ？」

「もちろん構わないよ！ 大歓迎さ！」

——大好物さ！

「そうなんだ。じゃあ、なる！ ボク、魔法少女になるよ！」

「ありがとう！ そう言つてくれると心強いね！」

「まだ何も説明してないのに、そう言つてくれるなんて嬉しいね！」

「魔法少女になつてくれるのなら、願い事を1つだけ叶えてあげる事になつてるんだ」「えーとーーじやあ、願い事を増やしたい！」

「この願い事は魔法の形を決める事にもなるんだ。だから色々と願うよりも、単純な方が強いよ！」

偏つた願いで、戦闘能力ゼロになる事もあるけどね。

「そうなんだーーじやあ、オールマイトになりたい！」

「それだとイズク君の姿がオールマイトになつてしまふよ。お母さんは君と判別できなくなるんじやないかな？」

オールマイトの姿で魔法少女になつたら大変だよ！

ムキムキで巨乳なのは間違いないね！

——魔乳S M A S H !!

「イズクくん、オールマイトのようになりたいーーなんて、どうかな？」

「それって、どう違うの？」

「イズクくんは、その姿のままで、オールマイトのようになれるんだよ！」

「そう、永久にね。

「そ、うなんだ。じゃあ、そ、うする！ ボクはオールマイトのようになりたい！」
「わかったよ！ おめでとう！ 君の精神は肉体を凌駕した！」

肉体から精神を取り出し、緑の宝玉として形成する。

緑谷イズクの精神を閉じ込めた器、これこそソウルジエムだ。

「新たな魔法少女の誕生だ！ ハッピー・バースデー！」

それから10年後、魔法少女となつたデクは、ヘドロ人間に襲われた。
その姿は魔法少女となつた4歳のままで、中学生に見えない。

それは4歳の時点で、肉体の成長が止まつていてるからだ。

正確に言うと肉体は死んで、魔法によつて維持されている。
だから魔法少女を辞めると、死ぬ。

「——変身」

緑の輝きに包まれて、その肉体は変化する。

男性から女性へ、地味な制服から白と緑のドレスへ。

魔力によつて編まれたドレスは、魔力を伴わない攻撃の通用しない戦闘服だ

「なんだ、こいつ——変態か！」

「変態じやない変身だ！」

「そつちの意味じやねー！ 男のくせにフリフリのドレスなんて恥ずかしくないのかー！」

「そういう個性なんだよ！ 恥ずかしいに決まってるだろ！」

ヘドロに包まれたデクは暴れるものの、脱出は叶わない。

ヘドロによる口への侵入は、魔力の防壁によつて防いでいる。
しかし、4歳の力を魔力で強化しても、人の力を超える事はなかつた。
ちなみにデクは知らないけど、あのドレスはボクの趣味だ。

「くそつ！ 子供のくせに妙に固いーー大人しく開きやがれ！」
「だれかー！ 変態でーす！ ここに変態がいますよーー！」

「——S M A S H！」

突然に暴風が巻き起こり、ヘドロ人間は吹き飛んだ。
バラバラになつたヘドロは辺り一面に付着する。

「げえーーオールマイト！？ もう追いついたのか！」

「その通り、私が来た！ 追いかけつこは、ここまでだ！」

ヘドロ人間はビンに詰め込まれ、封を施される。

オールマイトを見上げるデクは、憧れのヒーローに会えて感動していた。

「オールマイト！　あの、サインを——」

「すでに書いておいた！」

「家宝にします！」

「ずいぶんとヘドロまみれになつてしまつたようだ。遅れて、すまない」

「そんな事ありません！」

「本来ならば家まで送つてあげたい所なのだが、私も先を急いでいてね——分かつても
らえるだろうか？」

「はい、もちろんです！　がんばつてください！」

デクが引き止める事もなく、オールマイトは跳んで行く。

ヘドロ人間は間違いなく、警察へ引き渡されるだろう。

オールマイトの後継者として選ばれるイベントは無くなつた訳だ。

とは言え、雄英高校に通つてから個性を伝授されるケースもあるけれど。

オールマイトが見えなくなつても手を振り続けるデクに、ボクは声をかけた。

「ところでデクくん

「QB——せつかくオールマイトに会えたんだから浸させてよ」

「そうだね。じゃあ、後にするよ。嫌な事は後で聞いた方が良いからね」

「——もう！　そういう風に言われると気になるんだけど」

「魔法少女に変身したままだよ」

「にぎやああああああ!!」

デクは耐え切れず、地面に倒れてゴロゴロと転がつた。

魔法少女のドレスが汚れてしまうけれど、あれは魔力に戻せば綺麗になる。

「もしも時間を戻せたら、過去の自分に言つてやりたい——そいつは詐欺師だ！」

「そうなつたら、デクくんは無個性のままだよ。それでも良いのかい？」

「せめて、もつと成長してから契約するとかさあ！ ボクの身長は一生このままなんだよ!? なんで大人になるまで待てなかつたの!？」

「魔法少女だよ？ 大人が少女になれる訳ないじやないか」

「だましやすかつたからでしょ!?」

「それは否定できない事実だね。でも、悪いことばかりじやなかつたはずさ。もしも無個性のままだつたら、心ない差別を受けていたよ」

「恐いこと言わないでよ。ちよつと着替える時に、変な目で見られる事はあるけど——かつちゃんはアレだけど、みんな庇つてくれるし」

「デクくんの学校は、男女が同じ部屋で着替えるんだね。初耳だよ」

「同じ部屋な訳ないだろ!? 普通の学校だよ！」

幸せだね、デクくん。

無個性でないから、そうだつた時の気持ちが分からぬ。

欠けているからこそ、欲望は生まれる。

それを叶えてしまつた君は、自身が幸福である事に気付かない。

君にとつて優しい人は、誰かにとつて怖い人だつたんだ。

「ボクは知つてるよ。デクつて仇名を付けられて、いじめられるんだよね？」

「そんな名で呼ぶのはQBとかつちゃんだけだよ！ かつちゃんは、ほらアレだけ
どーーどうしてQBはボクを、そんな仇名で呼ぶの？」

「ボクは親愛を込めて、デクと呼んでいるのさ。特別な人は、特別な名で呼びたいものだ
ろう？」

「かつちゃんと被つてるから、別の呼び方に変えた方がいいよ」
「そうするよ、イズクちゃん」

「ごめん、やつぱりデクでいいよ。手が滑ると危ないからね」

無個性だった君を知つてるのは、この世界でボクだけだ。
だからボクは君を忘れないために、デクと呼び続ける。

オールマイツの修行を受ける事もなく、雄英高校を受験する日が来た。
たとえ世界が今年で滅ぶとしても、デクがヒーローを目指す事に変わりはない。

そもそも肉体の死んでいるデクは運動しても成長せず、いくら鍛えても無駄だ。
魔法を使わない限り、魔法少女としての攻撃力は人の力を超えられない。
そんな訳で口ボットを壊してポイントを獲得する事も叶わず、デクの不合格は明らかだ。

そうして試験の終了時間は迫り、ポイントのない巨大ロボットが登場する。
その足下にいる逃げ遅れた受験生を、デクは見つけた。
しかし、どう考えても間に合わない。
だからデクは魔法を使うしかなかつた。

「オールマイティ・オーバーロード——」

膨大な魔力が引き出され、デクのソウルジエムが急速に濁る。
その目は遠く離れた巨大ロボットを捉え、虚空を掴んだ。

デクの願いは、オールマイティのようになる事だ。

その願いは魔法となつて、デクに与えられている。

「——S M A S H ! ——」

次の瞬間、巨大ロボットは破壊されていた。

なにかに殴られたかのように後ろへ倒れ、ビルに引っかかり、道路を叩き割る。
そうして試験が終わるまで動き出す事はなかつた。

「残念だね。あんな倒し方じや、なにが起こつたのか分からぬよ」

「そうだね。でも、彼女は助かつた」

「そんなに泣いてたら説得力がないよ」

「――うん」

逃げ遅れた受験生は、他の受験生に助け出されている。

その助け出した受験生に、お礼を言つていた。

その様子を見ながらデクは、ソウルジエムの汚れをグリーフシードに吸わせている。

グリーフシードは魔女を倒すと入手できるアイテムで、魔力を回復できる。

デクの魔法は燃費が悪く、一発で魔力を使い切つてしまふほどだ。

そうしてデクの受験は終わつた。

「やつぱり故障じやない。誰かに壊されてる」

「でも、いつたい誰に？」

「あの瞬間の受験生全員を、カメラの記録で確認しかねえよな」

「――この受験生か？」

「しかし手を伸ばしているだけのようにも見えるわ」

「個性は魔法少女――魔法少女って何だ。変身するだけの個性でもないだろ」

「でも推測だよなあ。確たる証拠がない」

「周囲への聞き取り調査の結果も、変身する個性以上の事は出てこなかった
「面接、申請してみる?」

「ダメだ。公平性に欠ける。提示した試験は、筆記試験と実技試験だ。面接を加えるの
ならば全ての受験生に行わなくちゃならん」

「じゃあーー不合格ね」

「ああ、結論だ」

それは困るなア。

その様子を眺めていたボクは立ち上がつた。

しかしボクを認識できない彼等は気付く事もない。

言い忘れていたけれど、普通の人にはボクの姿は見えないんだ。

セキユリティなんて無いも同然だよ。

とあるパソコンの前に着いたボクは、前足でマウスを操作し、尻尾でキーボードを押
した。

そうして緑谷出久をヒーローコースの合格リストへ移し、保存する。

レスキュー・ポイントは60点、これで緑谷出久は7位になつた。

ところで何か忘れているようなーー逃げ遅れた受験生だ。

無重力の個性を持つ彼女は、その力で緑谷出久を救うはずだつた。
しかし、緑谷出久は落下する事もなく、彼女はレスキュー・ポイントを与えられない。
リストを確認して見れば、彼女は不合格となつていた。
ふむーーまあ、いいか。（無関心）

もう、そこにいない貴方

髪の毛を丸めて置いたような、特徴のある髪型だ。

モギモギという個性のせいで、そうなつてているのだろう。

彼を言い表したいのならば、エロの一言で足りる。

「やあ、はじめまして。ボクはＱＢ、魔法の使者だよ」

「ＱＢ先生！ 女にモテたいですーー！」

彼こと峰田実は、滑り込みながら土下座した。

そのチャンスを全力で拾いに行く姿勢は好感が持てる。

ミノルにとつて、命と人生を投げ出しても叶えたい願いなのだ。

ただの一度も叶えられなかつた願いは、極大の質量を有する。

「お安い御用さ！ でも、良いのかい？ 君が女の子になつてしまふんだよ？」

「変身してない間は男なんだろ？ 魔力切れさえ起こさなければ、ハーキハーキ！」

峰田実にとつてモテる事は最優先だ。

確実な方法があれば、あらゆるリスクを許容する。

峰田実にとつて恐ろしい事は、願いを叶える前に死ぬ事だろう。

峰田実にとつて命は重要だけれど、目的ではなく手段にすぎない。だから、こうして簡単に人生を、交渉の天秤へ載せてしまう。

「わかったよ！　おめでとう！　君の精神は肉体を凌駕した！」

肉体から精神を取り出し、紫の宝玉として形成する。

峰田実の精神を閉じ込めた器、これこそソウルジエムだ。

「ほら、鏡だよ・　自分の姿を見て『ごらん！』」

魔法少女になつたミノルは、”女にモテたい”と願つたミノルを見た。腰まで伸びる長い髪に、白に紫のラインが入つたジャージだ。

「か、かわいい？」

「そうだね！　かわいいね！」

女にモテたいと願つたから、どんな姿でもモテるよ！

「これが女の胸——！」

自身の肉体を触り始めたミノルを置いて、ボクは立ち去る。ボクは空気を読めるＱＢだからクールに去るのさ。

翌日、ミノルはジャージで登校した。

もちろん変身した姿、つまり魔法少女のままだ。

同級生の困惑する中、見知らぬ女子生徒の正体に気付いたのはデクだつた。

「峰田くん!?　まさかＱＢと契約したの!?」

「まーな」

「なんて事を——もう皆と同じように歳を重ねる事はできないんだよ!?」「つまり不老って事だろ?　いーじやん」

「魔女と戦わなくちゃいけない!」

「分かつてるよ」

「分かつてないよ!　魔女と戦つて死ぬかも知れないんだよ!?　魔力が切れたら男に戻れなくなるんだよ!」

「いーじやねーか。男に戻れなくたつて」

「本気で言つてるの?　どうしたの峰田くん、おかしいよ」

「——緑谷さん、そのように声を荒げてはいけません。峰田さんが怯えてらっしゃいます」

「ええ——?」

デクを止めたのは、教室にいた女子生徒だ。

「大丈夫、峰田さん?」

「ちょっと緑谷、大声あげないでよ」

「峰田の気持ちも考えてあげなよ」

次々と集まつた女子生徒は、壁のように取り囲んでミノルを守る。

「え？」

それに困惑しているのはミノルも同じだ。

信じられない物を見たかのよう目を丸くしている。

女子生徒の圧力を受けたデクは、何も言えなくなつてしまつた。

「朝礼だ、座れ。それと峰田、制服の採寸は昼休みに保健室で行う」

「ええ!」

驚いたのはデクを含む、男子生徒だ。

「なんだ?」

「いやいや! 峰田が女になつてるじゃないですか!」

「だから制服を採寸する。ジャージは、それまでの代わりだ」

「なんで、峰田が女になつてるんですか!?」

「事情は聞いた。だが、それは個人的なものだ。本人の許可なく話していい物ではない

「それなら、どうして! 魔法少女の事を先生は聞いているんですか!?」

そう声を上げたのはデクだ。

「聞いている。なにか問題があるのか?」

「魔法少女になつてはいけないんです!」

「なぜだ？」

「魔力を回復するために魔女と戦わなければなりません。危険です！」

「なぜ回復しなければならない」

「魔力が切れたら女性のまま、男性に戻れなくなります！」

「それは、なんの問題がある」

「男性でなくなつたら大変です！」

「緑谷、それは女性よりも男性が良いと、そう言いたいのか？」

女性軽視かな？

「——いいえ、そういう訳ではありません」

「女性か、男性か、性別を選ぶのは人の自由だ。だから、それは他人に押し付ける事ではないだろう」

このヒーロークラスの担任、イレイザーヘッドは合理的だ。

メリットとデメリットを比べて、メリットのある方を取る。

生徒の性別が変わつたとしても、それを問題として捉えなかつた。

「——ところで、その魔法少女に年齢制限はあるのか？」

「Q Bの姿が見えないと、魔法少女の素質はないそうです」

「そうか」

——先生は残念そうだ！

朝礼は終わって、授業時間だ。

休み時間になると、ミノルの下に女子生徒が集まる。

女子生徒と取り囲まれて、ミノルの姿は見えないほどだ。

「かわいーー！」

「ねえ、峰田。女の子のこと、私が教えてあげようか？」

「喜んで！　おいらはーー」

「まあ、峰田さん。せつかく女性になつたのですから、”あたし”と言つた方が可愛らしいですか？」

「そ、そ、うか？　あ、あ、あたーーわたし、は」

「あー、もう、かわいいなあ！　こいつめーー！」

その様子を男子生徒は、呆然と見ていた。

「オレ達は、いつたい何を見せられているんだ」

「オレも魔法少女になれば、あの中にーーー！」

「峰田に頼めば、胸を揉ませてくれると思うか？」

「止めた方がいい。死ぬぞ」

そんな中、デクは極めて深刻だつた。

「おかしい——いくら何でも、峰田くんに対する好感度が高すぎる。今にも峰田くん争奪戦が始まつても不思議じやないほどだ」

そうして昼休みになり、朝礼で言われた保健室へ向かう時間になる。

昼食を共に食べた女子生徒と別れ、やつとミノルは独りになつた。

その前へ立ち塞がつたのは、デクだ。

「峰田くん、QBに何を願つたの？」

ミノルは答えず、デクを無視する。

視線を合わせないように目を逸らしていた。

「それは、やつてはいけない事だよ！ そんな事したつて本当は——」

ミノルの腕を、デクは掴む。

「触るなよ！」

デクの手をミノルは振り払う。

魔法少女に変身しなければ、デクは4歳程度の力しかない。

「峰田くん——？」

ミノルは怯えていた。

その表情から恐怖を見て取れる。

そのままミノルは走り去り、デクは引き留める事ができなかつた。

「いつたい、どうしたの、峰田くん」

まるで別人のように思えた。

ミノルの考えている事が、デクは分からない。

4歳で成長の止まつたデクは幼く、恐がられる事もない。

それなのにミノルは、デクの何を恐れているのだろうね。

午後はバスで災害訓練施設へ向かう。

そこでヴィランの襲撃を受け、生徒は各所へ散らされた。

デクとミノルは蛙吹梅雨という、カエルの個性を有する同級生と行動を共にする。
変身して緑と白のドレスで身を包み、デクは魔法少女となつて戦闘体勢を整えた。

そうして水難エリアのヴィランを行動不能にして、3人は入口へ戻ろうとしていた。

「——ううつ」

ミノルが苦しみ、床に座り込む。

その手から転げ落ちたソウルジエムは黒く染まつていた。

「しまつた、ずっと変身したままだつたから——峰田くん！」

ソウルジエムの魔力が尽きて、紫色の輝きもない。

ソウルジエムの表面が割れ、そこから黒い光が溢れ出した。

「その光に照らされたデクの顔は暗くなり、その後ろは明るくなる。

「なんだ、これーーまるで光と影が逆になつたような」

「その黒い光に飲み込まれた。

周囲の風景は一変し、肉の壁に包まれる。

地面を踏んで見ればブヨブヨで、まるで生物の体内のようだ。

周囲を見回せば、ミノルと蛙吹梅雨も近くにいた。

「峰田くん、大丈夫?」

「あ、ああーーどこだ、ここ」

「魔女の結界だ。君のソウルジエムから魔女が生まれた。そうだよね、Q.B」

「うん。これが今まで、君の倒してきた魔女の正体だよ」

ずつと側にいたボクは、姿を現して見せる。

魔法少女が魔女になる事をデクは知らなかつた。

もしも魔女になると知つていたら、もつと必死でミノルを止めただろう。

だからボクは教えなかつたし、知られないように隠していた。

「ボクが殺してきた魔女は人間だつたの!!」

「それは人の定義によるね。魔力を動力として生きている生物も、人に含めていいのかな?」

「Q B、君つて奴は——！」

「怒つてる時間はあるのかな？ 今のミノルにソウルジエムはない。早く中身を取り戻さないと、本当に死んでしまうよ？」

「中身つて——魔女！？」

「ほら、あっちから迎えも来ていいる」

ボクの示す先に、黒いゴムのような玉が跳ねていた。

あれは魔女の使い魔で、本来ならば攻撃的だ。

「襲つてこない？」

「招かれているのさ」

「——そうね、早く行きましょう。」彼が待つてゐるわ」

蛙吹梅雨は虚空を見つめて、そう言つた。

首に浮かび上がつてゐるのは、見慣れぬ刻印だ。

それは魔女の口付けと呼ばれ、魔女に魅了されている証だつた

とは言え、デクのような魔法少女ならば刻印を消すのは難しくない。

「——あら？ 緑谷ちゃん、ここは何処かしら？」

「大丈夫、蛙吹さん？」

「よく分からぬけれど、梅雨ちゃんつて呼んでね」

「うん、元に戻ったね。よかつた」

初めて見たように、蛙吹梅雨はキヨロキヨロと辺りを見回している。

「これってヴィランの個性かしら？」

「魔女の結界だよ。個性よりも複合的で大規模な、厄介な性質があるんだ」

そこでデクは気付いたようだ。

「峰田くんの事、どう思ってる？ なにか変わつてない？」

「そうね——ハツキリ言うけれど、女の子になるのなら努力した方がいいと思うわ。今
のままじゃ、女の子として失格よ」

「そ、そんな——！」

「やつぱり、峰田くんの魔法が解けてる」

女の子として失格だった事にミノルは落ち込む。

それに対してもデクは、魔法が解けた事に安心していた。

クラスメイトを魔法で操っている様は、気持ちのいい光景ではない。

「確認だけど峰田くん、男性に戻れなくなつてる？」

「ああ——うん、そうみたい」

それは前から言われていた事だ。

魔力が尽きれば男性へ戻れなくなる。

しかし男性に戻れないと知つて、ミノルは安心した。

「まとめるよ。さつき峰田くんから魔女が生まれた。この魔女は絶望を糧とする存在で、倒せるものなら倒したい。でも今回は、ソウルジエムを取り戻さないと峰田くんが死んでしまう。だから、これからボクらは魔女の下へ向かいたい」

「良いと思うわ。ヴィランに襲われている皆には悪いけど」

蛙吹梅雨は賛成した。

とは言え、取り返すべきソウルジエムは碎け散つた。

ソウルジエムが魔女ならば、どうやつて取り戻せば良いのかデクは知らない。

「峰田くん？」

「おいらは——わたしは——」

ミノルは座り込んだまま悩んでいる。

どうしてミノルが迷っているのか、デクは分からない。

「進みたくない？」

「——ああ

「戻りたい？」

「——いいや」

「ここに居たい？」

「——いいや」

「峰田くん、ボクは君に死んでほしくない。だから連れて行くよ。いいね？」

返事はなかつた。

まるで魂を抜かれてしまつたように、気力が衰えている。

ソウルジエムが碎けてしまつた事を考えれば、その例えも間違つてはいない。

ミノルを連れて、デクと蛙吹梅雨は進む。

ブヨブヨとした肉の床は、一步進むごとに不快感を与える。

誰かの内臓を歩いているような空間の狭さも合わさつて、窒息しそうな錯覚も覚え
た。

「何か来る」

デクは足を止める。

前方の横穴から現れたのは、虚空を見つめフラフラと歩く集団だ。

魔女の口付けを刻印された人々は、生徒たちを襲撃したヴィランだった。

「——あれって、上鳴くん、耳郎さん、八百万さん？」

ヴィランに混じつて仲良く歩いているのは、同級生の3人だ。

その3人に近寄つたデクは、魔女の口付けに触れて解除する。

「あれ？ どこだ、ここ？」

「あたし、いつの間に？」

「まあ、緑谷さん。助けてもらつたようで、お礼を申し上げますわ」

3人も合流して、一緒に魔女の下へ向かう事になる。

しかし問題は、まだ魔女の支配下にあるヴィランの集団だ。

「魔女の口付け——ですわね」。それは残したまま私の創造した縄で縛り、置き去りにするのは、どうでしょう？」

「でも意識のない状態で、”緑谷ちゃんの言う使い魔”に襲われたら危ないわ」

「その”魔女つてやつ”と戦つてる途中でジャマされたら大変でしょ？ 魔女の口付けは解除して、その後ウチの個性で気絶させる？」

「このまま放つておいて、さつさと”魔女つてーの”を倒せば良いんじやね？」

「緑谷さん。専門家としては、どうなのでしょう？」

「結界に取り込まれた人は、他の所にもいると思う。そういう人達よりも早く、魔女の下へ辿り着く必要がある。だから上鳴くんの考えに賛成するよ」

そういう訳でヴィランは放置し、一行は先を急ぐ。

すると、また肉壁の横穴から人が現れた。

「轟くん？」

「おまえら、無事だつたのか」

「あれ？ 轟くんは独りだつたの？」

「ああ、誰も居なかつた」

「——よく無事だつたね、轟くん」

デクはジト目で、轟焦凍ことショートを見つめる。

「どうした。オレが何かしたのか？」

「さあ——？ さつきまで普通だつたよな、緑谷」

するとデクは小さな背を伸ばし、ショートの胸をポンポンと叩いた。

「——うん、本物だね」

「なんだ、”魔女の使い魔”と疑つてたのか？」

そうしてショートを加え、肉で形作られた通路を進んで行く。

——そんな一行の背後で、まるで人が歩いているかのように、肉の床が沈んでいた。

魔女の使い魔の案内で、迷うことなく魔女の下まで直行だ。

通路を遮断するように張られた肉の膜を破ると、これまでと違つた通路に出る。

ピンク色だつた肉は赤く染まり、ドクドクと鼓動を伝えていた。

「なあ、なあ、これつてアレかな？」

「私の個性はカエルだから——」

「いけません、耳郎さん、蛙吹さん。殿方もいらっしゃるのですよ？」

「なあ、これつてソーセージに似てね？」

「こんな腸に詰められたソーセージは食欲が失せるな」

その足下が自動で動き始め、一行を前へ運び始める。

「なになに!?」

「罠か!?

一行は足を曲げ、姿勢を下げて備えた。

「あれ、見て！　壁に何か映つてる！」

それは見知らぬ少女だつた。

どこかの制服を着て、その上半身だけが映つている。

「——ねえ、峰田つて気持ち悪いよね」

「——スカートばかり見て、気持ち悪い」

「——更衣室を覗こうとしたんだつて、さいてー」

「——うわー、気持ち悪い」

壁に映つた少女達は、次々に入れ替わつて、そう言つた。

「違う！　これは私じやない！　私じやない！　私じやない！！」

ミノルは耳を塞ぎ、叫ぶ。

しかし、ベルトコンベアのように止まる事を許さない。

床は加速を始め、映像が切り替わる速さも増していった。

次々に少女達は現れ、消えて、その言葉を口にする。

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「気持ち悪い」

「——死ねば良いのに」

そうして通路の先へ辿り着き、最後の膜が破られる。

峰田実にとつて最も恐ろしい敵が、結界の最奥で待っていた。
髪の毛を丸めて置いたような、特徴のある髪型だ。

モギモギという個性のせいで、そうなっているのだろう。

彼を言い表したいのならば、エロの一言で足りる。

「なあ、気持ち悪いよなあーーおいらつてさ」

そこに”彼”はいた。

私の生まれた、その理由

峰田実のソウルジエムから魔女が生まれた。

デクとミノルは合流した仲間と共に結界の奥へ向かう。

そこで待っていたのは魔女ではなく、男性の峰田実だつた。

「峰田くん？」

「おう、おいらだ。もう助けに来てくれないのかと不安になつたぜ」

「じゃあ、こつちの峰田くんは——？」

「そいつは偽物だ。おいらは、ずっとソウルジエムに閉じ込められてたのさ」

「ちがう！ そいつは偽物だ！ 緑谷の言つてた魔女つて奴だろ！ そうだよな、緑谷！」

「ひでーよなあ。おいらの体を奪つておいて、自分を好きになるように女を洗脳してたんだぜ。そうだよな、緑谷」

それは事実だ。

しかしデクとしては、男の峰田実を怪しいと思つてゐる。

そのデクの返事に詰まつた間は、洗脳が事実である事を示してしまつた。

「本当なのか、緑谷？」

「女子が峰田をチヤホヤしてて、おかしかつたよな」

「たしかに思い返してみると、あれほど可愛がつていた自分に違和感を覚えますわ」「ちよつと待つた。ウチ、峰田に抱きついてなかつた!?」

「どつちも本物に見えるわ」

本当に入れ替わつていた可能性もある。

なぜならば魔法少女になつたままミノルは変身を解かなかつた。

今は変身の解けない状態になつたから、男性に戻つて見せることもできない。

男性の峰田実は昨日から、行方不明も同然だ。

「待つて、違う。おいらは、わたしはーー」

「おいらが峰田実だ。じゃあ、おまえは誰だよ?」

「わたしはーー!」

私こそ峰田実であると、ミノルは答えられない。

事実として2人を見比べ、峰田実と認識されるのは男の方だ。

脱ぎ捨てたはずの古い自分が、勝手に歩き出して峰田実を主張している。

峰田実という立場を失つたミノルは、名もない少女に過ぎなかつた。

「ボクは峰田くんーーいいや、彼女。峰田さんを信じるよ」

そう言つたデクは、峰田実に立ち向かう。

「冗談だろ緑谷、そんなウソばかりの女の何を信じるんだ？ さつきから口調もブレブレで、演技してると分かるだろ？ 信じられるような事を、そいつが何かしたのか？」
「ボクと峰田さんが会つて間もない。だからボクは真偽を判別できるほど、峰田さんの事を知らない」

「おいらは知つてるぜ。代わりに言つてやるよ。そいつは女の体しか見てないエロ猿だ。クラスメイトの心を魔法で操つて、おまえが止めろと言つても聞かなかつた。人の話を聞かないし、自分勝手だ」

「それでも峰田さんが助けを求めているから、ボクは峰田さんを信じるよ」「なに言つてんだ、緑谷？ おまえもヒーロー志望なら、そいつを捕まえて、警察に突き出すべきだろ？」

「違うよ、峰田くん。ヒーローなら助けを求める人に、手を差し伸べなくちやならない」「そいつはヴィランだ！ 体を奪われたおいらの気持ちも分かれよ！ こんな所に閉じ込められて、おいらだつて苦しかつたんだよ！ それとも女の味方しかできないのか！」

「君のことも信じるよ、峰田くん」

「じゃあ、おいらの体を返せ。なあ、おいらの体は、どこだ？」

「それは——」

「それはデクの知らない事だ。
だからボクは代わりに答える。

「もう、ないよ。残っているのは、そこにある女性の体だけさ。だつて彼女が使い潰してしまったからね」

「そんなの知らなかつた！ 誰も教えてくれなかつた！ 私のせいじやない！」

ミノルは悲鳴のように声を上げる。

「おまえのせいだ！ おまえが、おいらの体を奪つたからだ！ 返せよ、おいらの体だ
！」

肉体を失つた峰田実は激怒した。

「じゃあ、おまえの体をくれよ！」

「イヤだ、これは私の体だ！」

「違う。その体から出て行けって意味じゃない」

「じゃあ——どんな意味だよ」

「その体を好きにさせてくれよ。おいらの気が済むまで」

「——ひつ」

峰田実の視線が、ミノルの体をなぞる。

ミノルは怯え、顔を歪ませた。

「いいだろ？ だつて元は、おいらの体だ」

「イヤだーー！」

「未経験のまま死ねるか！ なあ、そうだろ上鳴！ おまえも男なら、この気持ち分かるよな！」

突然に話を振られた上鳴電気は、激しく動搖する。

すぐ側に女子のいる状態で、その質問は地獄だ。

「誰でも良いって訳じやないだろ」

上鳴電気はキリッとした顔で、そう言つた。

「誰でも良いんだよ！ 八百万でも！ 蛙吹でも！ 一一耳郎でも！ 女なら誰でも良いんだよ！」

「おい、今、ウチの前だけ間が空かなかつたか？」

「峰田くん、ボクは君に死んでほしくない！」

「うるせーよ、緑谷！ おいらは、エツチな事して死にたいんだよおおお!!」

「分かつたよ、峰田くん。ボクで良ければーー」

4歳で成長の止まつた幼い体を、デクは差し出した。

「おまえの半分は男だろ！」

「誰でも良いって言つたじやないか!?」

「男に戻れる奴は女じやねえ!」

「わがままだなあ!」

互いに荒い息を吐く。

「体を奪つた責任を取つてくれよ——なあ、おいら」

「ちがう」

「違わない。おまえのせいだ」

「私のせいじやない」

「おまえが! モテたいと願つたんだ! そうして、おいらを閉じ込めた!」

「私じやない! モテたいと願つたのは、おまえだ! 自業自得だろ!」

「女に囲まれて良い気分だつたくせに! 都合の悪い部分だけ押し付けるなよ!」

「私は私だ! もう峰田実なんて関係ない!」

「——なんだつて?」

その声は、これまでと違つた。

憤怒の中に、黒い憎悪が混じる。

「おまえは、おいらだ。おまえの体は、おいらのものだ」

「ちがう。おまえの体じやない。これは私の体だ」

「おいらの体を奪つておいて、よくも言つたな！」

「どうせ何の役にも立たなかつた体じやないか——童貞」

「童貞で何が悪い！」

「悪いよ。だつて今まで、誰にも愛されなかつた証明だ」

「それを、おまえが言うのか！」

「男なんて、何の意味もなかつた。何の役にも立たなかつた。何の成果もなかつた」

怯えていた女は立ち上がり、男へ立ち向かう。

「——かわいいって言つてくれる」

「——私を見てくれる」

「——私を愛してくれる」

ささやくように女は呟いた。

とても嬉しそうに女は言つた

女は初めて笑顔を浮かべた。

「これまでの人生で、こんなに幸福な事はなかつた」

——大丈夫、峰田さん？

——ちよつと緑谷、大声あげないでよ

——峰田の気持ちも考えてあげなよ

——もう、かわいいなあ！　こいつめー！

「これまでの人生は、無駄だつた。男に生まれた私は、間違いだつた」
希望の中に潜む絶望だ。

女は別れの言葉を口にする。

「私は女がいい——男の私なんて、いらぬ！」

そう告げられた峰田実の表情は、言い表しにくい。

顔の半分は笑つて、顔の半分は泣いていた。

「ああ、そうかよ——おいらも！　おまえなんか、いらねえ！」

泣き叫ぶように、決別の言葉は告げられた。

峰田実を包み込むように膨大な魔力が立ち昇り、物理的な圧力となつて広がる。
立つていられないほどの圧力は、波となつて襲いかかり、デクを地面へ押さえ付けた。

「——我は影、真なる我」

WARNING!

WARNING!

WARNING!

WARNING!

WARNING!

WARNING!

WARNING!

赤い警告が壁一面に浮かび上がった。

峰田実と呼ばれていた彼は、自身に存在を否定された。体を失い、名を失い、心を失つて、その形を保てない。崩れ果てた自我は理性を保てず、獸となつて墮ちた。
その獸に名を付けるとするのならば——【求愛の魔女】